

講義による高齢者イメージの変化 — 発達過程における他世代とのかかわり経験との関連 —

奥村 由美子・久世 淳子

問題

日常生活において、家庭や地域でさまざまな世代が相互により良い関係を築き、暮らすことが大切である。超高齢社会となった我が国では、2060年には、現役世代(15～64歳)1.3人で1人の高齢者を支える社会になることが推計されている(平成27年版高齢社会白書)ことから、高齢者について正しい認識をもち、理解を深めることが期待される。

高齢者に対して他の世代がどのような認識をもっているのかという「高齢者観」については、主には高齢者イメージにより検討されてきた。高齢者イメージの研究は、青年期にあたる大学生を対象に、Semantic Differential法(SD法)により測定されている報告が多くみられる。保坂・袖井(1986, 1988)によっては、10項目の形容詞対、および50項目の形容詞対により、大学生の高齢者イメージが検討された。その結果、大学生の高齢者に対するイメージはおおむね否定的であり、因子分析により「有能性」、「活動・自立性」、「幸福性」、「協調性」、「温和性」、「社会的外向性」という6因子が抽出された。中でも、能力に関連する「有能性」(知恵や人格といった精神面における評価)や、「活動・自立性」(活動的であるか否か、働いて自立する能力があるか否かといった肉体面における評価)が重要な因子とされたが、学生が高齢者の価値を積極的に見出そうとしたり、高く評価しようとしているわけではないことも指摘された。さらに、肯定的イメージとしては「温和性」の強い存在が示された。それには、「高齢者や高齢者問題への関心」や「高齢者とかかわる機会」が関連しており、同居経験それ自体は明らかに関連要因ではないことが指摘されている。このことから、発達過程における学生個々の経験が、高齢者への認識に違いをもたらすと考えられる。

また、青年期以前の高齢者イメージについても報告が多くみられている。たとえば、中野・冷水・中谷・馬場(1994)によっては、小中学生に対するSD法による高齢者イメージ測定により、低学年ほどイメージは肯定的で、高学年ほど否定的であることや、幼い時の高齢者との交流経験が多いほど高齢者イメージが肯定的であることが報告されている。また、村山(2009)は、高齢者と小学生の交流が子どもに及ぼす影響を、接触頻度や行動の多様性、および主観的親密感という側面から検討した。その結果、有意義な関係性の構築には、高齢者に対する心的な親密感を高めることが重要であることや、そのために両世代が交流する場所と十分な時間が確保され、その中でコミュニケーションを通じた交流の必要性が指摘された。さらに、村山他(2011)は、高

齢者の絵本読み聞かせボランティアによる小学生との交流によって、小学生の「高齢者ボランティアとの親密さ」、「絵本読み聞かせへの関心」、「高齢者イメージ」を媒介として、その後の、「中学入学後の地域活動参加意識」に影響することを指摘した。これらの報告は、研究方法が異なっているものの、発達過程における高齢者との質の高いかかわり経験や主観的な親密性を高める経験が高齢者への肯定的認識にもたらす意義を示すものであると考えられる。

奥村・久世(2009)は、青年期にある大学生の高齢者イメージには、発達過程における高齢者とかかわり経験や高齢者への肯定的感情が関連することを示した。大学生にとっては、大学での講義が高齢者について正しく豊富な知識を得るためのひとつの貴重な機会となることから、高齢者への関心を高め、理解を深めることにつながる講義を実施する必要がある。たとえば、看護の分野においては、高齢者の看護は高齢者観に左右されるという観点から、主に実習や施設見学等による高齢者観における変化が積極的に検討されてきた。しかし、高岡・岡本・榊原・小堀(2011)は、実習や施設見学などを通じた従来の方法が、労力やコスト、時間等を要し、どの教育機関でも実践できるとは限らないということから、高齢者イメージを豊かにする新たな教育方法の必要性を指摘し、老年看護学概論の講義による学生の高齢者イメージの変化が検討された。この研究では、学生の高齢者イメージは多岐にわたってはいたが、学習内容の理解を高齢者イメージへつなげることや、学習内容を自らの生活体験と結びつけて理解するというプロセスをたどっている可能性が見出され、高齢者理解を深めるための教材に活用できることが示唆された。

また、高齢者イメージはSD法により測定されることが多いが、高齢者の看護では生活援助が中心となることから、高齢者への抽象的なイメージだけではなく、生活等の具体的なイメージを把握することの必要性も指摘されている(大塚・正野・日浦・白井, 1999)。

これらのことから、教育方法を工夫することや、具体的なイメージを測定できる方法を導入する必要性が高いと考えられる。

そこで、本研究では、発達過程における他世代とかかわり経験を調べるとともに、高齢者への具体的な理解につながるように異なる教材を用いた講義を行い、高齢者についてのイメージや知識の変化を検討することを目的とする。

方法

対象

調査対象は、異なる年度において医療福祉系大学で高齢者にかかわる心理学の講義を受講した学生332名であった。講義は、学生の所属する複数学科が履修できる選択科目であった。このうち、年齢が19歳から22歳で、講義前後に質問紙調査に回答した219名を分析対象とした。最初の年度(以下、A年度)の対象は111名(男性40名、女性71名)、平均年齢19.77($SD=0.77$)歳であった。また、次の年度(以下、B年度)の対象は108名(男性28名、女性80名)、平均年齢19.64($SD=0.63$)歳であった。

手続き

発達過程における高齢者とのかかわり経験や高齢者イメージ等を測定することを目的として、各年度の講義の初回と最終回に、無記名による質問紙調査を集団で実施した。講義を受講することによる高齢者についてのイメージと知識の変化を確認するために、学生個々に、同一者による回答であることを学生本人のみが識別できる番号の記入を求めた。

講義はいずれの年度においても、高齢社会の現状、加齢による認知機能や人格の変化、老年期の適応と精神的老化、認知症性疾患に対する心理的援助等からなる同様の構成により週1回、計15回実施されたが、用いられた教材は年度により異なった。A年度に用いたテキストに比べて、B年度のテキストには、高齢者や高齢期の特徴についてのより具体的なエピソードが盛り込まれており、講義においてはそのエピソードを活用した導入および展開が行われた。

倫理的配慮

調査に先立ち、研究目的、回答が任意であること、および回答を統計的に処理し、個人を特定することはないこと、研究目的以外に使用しないことを、調査対象者に口頭、および紙面にて説明した。また、調査への回答をもって、調査に同意したものとした。

調査項目

質問紙調査では、対象者の基本属性とともに次の項目について調査した。

高齢者と認知症に関する知識 高齢者に関する知識、認知症に関する主観的な知識、認知症に関する知識をたずねたが、本研究では、高齢者の知識についてのみ検討した(以下、知識得点)。知識得点の項目は、奈良県医師会による報告書(1991)で用いられたFacts on Aging Quiz(FAQ) 25項目(Palmore, 1977)について、予備調査の結果をふまえて15項目への改訂が試みられた(久世・奥村, 2010)。本研究における知識得点の測定では改訂後の項目を用い、「正しい」「正しくない」の2件法により回答を求めた。

高齢者イメージ 先行研究で用いられた3種類の測定

方法を用いた。まず、保坂他(1988)において高齢者イメージの測定に用いられた50対の形容詞対について、奥村他(2009)での調査結果をもとに、「厳しいー優しい」、「遅いー速い」、「憎らしいー愛らしい」等からなる12対に改訂された項目により、7件法での回答を求めた(以下、SD法)。さらに、認知症高齢者のイメージの測定に用いられてきた9項目(奥村・谷向・久世, 2002;奥村他, 2009)(以下、行動特性イメージ)により、6件法での回答を求めた。行動特性イメージはSD法の形容詞対とは異なり、より具体的なイメージを把握することを想定されており、「意欲的であるー意欲的ではない」、「物事や周囲への関心が高いー物事や周囲に無関心である」、「感情表現が豊かであるー感情表現が乏しい」等の項目から構成されている。なお、調査では、認知症の認識を測定する9項目についても回答を求めたが、本研究では用いなかった。

他世代とのかかわり経験 他世代とのかかわり経験は、看病や介護の経験、高齢者との同居経験を2件法で回答を求めたほか、近隣や近隣高齢者、祖父母とのかかわり、親や祖父母への様子の評価(親の、祖父母や他的高齢者への様子、祖父母の、親に対する様子に思いやりを感じたか)、および高齢者への感情(高齢者への関心、高齢者が好き)等については3件法での回答を求めた。高齢者との思い出については5件法での回答を求めたが、分析および結果の記載においては3件法への再割り当てにより行った。また、接する機会の多かった高齢者については、続柄別による複数回答により求めた。

分析方法

まず、調査対象者全体の、基本属性および他世代とのかかわり経験について記述統計により確認し、他世代とのかかわり経験については、年度による差がないことを χ^2 検定により確認した。次に、2種類のイメージ測定法について、講義前後の回答をあわせて因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。それぞれの因子について、クロンバックのアルファ係数(Cronbach's α)を算出し、信頼性を確認した。さらに、抽出されたそれぞれの因子の因子得点を用いて、講義初回の高齢者イメージについて年度により差がないことを確認したうえで、大学生の高齢者イメージと、それぞれのイメージとの他世代とのかかわり経験等との関連、および講義受講による高齢者のイメージおよび知識の変化を t 検定、および一要因分散分析(tukey法による多重比較)により検討した。なお、本研究の分析には、IBM SPSS Statistics 22を用いた。

結果

高齢者イメージの因子構成

2種類のイメージ測定法それぞれによる講義前後の高齢者イメージの回答について因子分析を行った。因子数は、スクリーンプロットや解釈可能性を考慮して決定し、いずれの

因子についても、40以上を採用した。因子分析により得られた回転後の因子負荷量をTable 1に示した。

SD法については2つの因子が抽出された。第1因子は、「統合・柔軟性」(つめたいーあたたかい, 不幸なー幸福な, 等の6項目, Cronbach's $\alpha=.758$)であった。第2因子は、「能動性」(弱いー強い, 暇そうー忙しそう, 等の6項目, Cronbach's $\alpha=.753$)であった。

行動特性イメージについても2因子が抽出された。第1因子は、「円熟性」(穏やかであるー感情の起伏がはげしい, 周囲に配慮するー自己中心的である, 等の4項目, Cronbach's $\alpha=.808$)であった。第2因子は、「積極性」(意欲的であるー意欲的ではない, 物事や周囲への関心が高いー物事や周囲に無関心である, 等の4項目, Cronbach's $\alpha=.698$)であった。

いずれの因子についても得点が高い方が肯定的なイメージであることをあらわし, これらの因子得点を用いて分析をすすめた。

発達過程における他世代とのかかわり経験

まず, 対象者の, 発達過程における高齢者等の他世代とのかかわり経験の結果を示す(Table 2)。

看護や介護の経験は, 経験のない学生の方が149名(68.0%)と, 経験のある学生よりも多かった。65歳以上高齢者との同居については, 118名(53.9%)という半数以上の学生が経験していた。生まれ育ったところでの近隣とのおつきあいは, 140名(63.9%)がよく経験していたが, 近隣の高齢者とのおつきあいに限ると, 117名(53.4%)とやや少なかった。自分の親の, 祖父母に接する様子については, 162名(74.0%)が思いやりがあると感じており, 祖父母以外

Table 1 因子分析の最終結果(主因子法バリマックス回転; 回転後の因子行列)

		Factor Loadings		共通性
		Factor 1	Factor 2	
SD法				
Factor 1	統合・柔軟性 ($\alpha=.758$)			
	つめたいーあたたかい	.798	.095	.645
	不幸なー幸福な	.674	.132	.472
	憎らしいー愛らしい	.595	.085	.361
	愚かなー賢い	.571	.140	.346
	厳しいー優しい	.508	-.135	.276
	固いーやわらかい	.446	.007	.199
Factor 2	能動性 ($\alpha=.753$)			
	弱いー強い	.048	.692	.482
	暇そうー忙しそう	.059	.613	.379
	受動的ー能動的	.070	.610	.377
	遅いー速い	.062	.604	.369
	鈍いー鋭い	.030	.485	.236
	保守的ー進歩的	.010	.470	.221
		因子寄与	2.24	2.12
		累積寄与率(%)	18.69	36.36
行動特性イメージ				
Factor 1	円熟性 ($\alpha=.808$)			
	穏やかであるー感情の起伏がはげしい	.744	.120	.567
	周囲に配慮するー自己中心的である	.694	.283	.562
	落ち着いているー落ち着きがない	.679	.038	.463
	人と信頼関係を築くことができる ー疑い深い, ひがみっぽい	.641	.390	.563
Factor 2	積極性 ($\alpha=.698$)			
	意欲的であるー意欲的ではない	.062	.804	.650
	物事や周囲への関心が高い ー物事や周囲に無関心である	.084	.705	.504
	自立的であるー依存的である	.289	.439	.276
	感情表現が豊かであるー感情表現が乏しい	.236	.418	.230
		因子寄与	2.06	1.76
		累積寄与率(%)	25.70	47.68

Table 2 発達過程における他世代とのかかわり経験

項目	人数(%)						年度間の比較		
	はい		どちらともいえない		いいえ		df	χ^2	
	全体	A年度 B年度	全体	A年度 B年度	全体	A年度 B年度			
これまでに、どなたかの看病や介護を経験したことがありますか。(ボランティア活動を除く)	70 (32.0)	34 (30.6) 36 (33.3)			149 (68.0)	77 (69.4) 72 (66.7)	1	.08 n.s.	
高齢者(65歳以上の方)と同居したことがありますか	118 (53.9)	62 (55.9) 56 (51.9)			101 (46.1)	49 (44.1) 52 (48.1)	1	.21 n.s.	
生まれ育ったところでは、近隣とおつきあいがよくありましたか	140 (63.9)	71 (64.0) 69 (63.9)	60 (27.4)	29 (26.1) 31 (28.7)	19 (8.7)	11 (9.9) 8 (7.4)	2	.53 n.s.	
生まれ育ったところでは、近所の高齢者とおつきあいがよくありましたか	117 (53.4)	56 (50.5) 61 (56.5)	66 (30.1)	31 (27.9) 35 (32.4)	36 (16.4)	24 (21.6) 12 (11.1)	2	4.42 n.s.	
あなたの親が、あなたの祖父母と接する様子を見て、思いやりがあると感じていましたか	162 (74.0)	81 (73.0) 81 (75.0)	47 (21.5)	26 (23.4) 21 (19.4)	10 (4.6)	4 (3.6) 6 (5.6)	2	.89 n.s.	
あなたの親が、あなたの祖父母以外の高齢者と接する様子を見て、思いやりがあると感じていましたか	157 (71.7)	78 (70.3) 79 (73.1)	58 (26.5)	30 (27.0) 28 (25.9)	4 (1.8)	3 (2.7) 1 (0.9)	2	1.03 n.s.	
あなたの祖父母が、あなたの親と接する様子を見て、思いやりがあると感じていましたか	159 (72.6)	77 (69.4) 82 (75.9)	51 (23.3)	28 (25.2) 23 (21.3)	9 (4.1)	6 (5.4) 3 (2.8)	2	1.61 n.s.	
高齢者に関心がありますか	142 (64.8)	71 (64.0) 71 (65.7)	62 (28.3)	32 (28.8) 30 (27.8)	15 (6.8)	8 (7.2) 7 (6.5)	2	.09 n.s.	
あなたは、高齢者のことが好きですか	128 (58.4)	68 (61.3) 60 (55.6)	86 (39.3)	39 (35.1) 47 (43.5)	5 (2.3)	4 (3.6) 1 (0.9)	2	3.00 n.s.	
あなたにとって、高齢者との思い出はどのようなものですか		良い	どちらともいえない		悪い		2	.55 n.s.	
		196 (89.5)	99 (89.2) 97 (89.8)	15 (6.8)	7 (6.3) 8 (7.4)	8 (3.7)			5 (4.5) 3 (2.8)
もっとも接する機会の多かった高齢者とあなたの関係(かかわりがあった場合の人数(%))	父方	①祖父		②祖母		⑤その他		1	①.00 n.s. ②.26 n.s. ③.07 n.s. ④.99 n.s. ⑤.48 n.s.
		41 (18.7)	21 (18.9) 20 (18.5)	92 (42.0)	49 (44.1) 43 (39.8)	2 (0.9)	2 (1.8) 0 (0.0)		
	母方	③祖父		④祖母					
		38 (17.4)	18 (16.2) 20 (18.5)	97 (44.3)	45 (40.5) 52 (48.1)				

他の高齢者に接する様子については157名(71.7%)が思いやりがあると感じていた。また、祖父母の、親に接する様子についても、159名(72.6%)が思いやりがあると感じていた。高齢者に対しては142名(64.8%)が関心をもっていたが、高齢者のことが好きな学生は128名(58.4%)にとどまった。また、196名(89.5%)の学生においては、高齢者との良い思い出をもっていた。最も接する機会の多かった高齢者との関係は、母方の祖母である場合が97名(44.3%)と最も多くを占めた。

これら発達過程における他世代とのかかわり経験については、年度間に差は認められなかった。

受講前の比較

高齢者イメージと高齢者についての知識 講義受講前の高齢者イメージと知識得点をTable 3に示した。

高齢者イメージ、および知識得点について、年度間に差がないかどうかを確認したところ、高齢者イメージについては、統合・柔軟性、能動性、円熟性、積極性のいずれについても年度間に差は認められず、知識得点についても年度間に差は認められなかった。

高齢者イメージ、高齢者についての知識と他世代とのかかわり経験との関連 高齢者イメージや知識得点と、他世

代とのかかわり経験との関連を検討した(Table 4)。

その結果、看護や介護の経験については明らかな関連は認められなかった。同居経験については「能動性」について有意傾向が認められたのみにとどまり、同居経験がない場合にイメージ得点がやや高い可能性が示された。近隣や近隣高齢者とおつきあいにに関しては、「統合・柔軟性」の得点差について有意傾向が認められた。親の様子への評価に関しては、祖父母への様子について「統合・柔軟性」、「円熟性」において有意差が認められ、祖父母以外の高齢者への様子では、「統合・柔軟性」、「積極性」について有意差が認められた。いずれについても親の様子に思いやりを感じていた場合にどちらともいえない場合にくらべてイメージ得点が高かった。祖父母の、親に接する様子に思いやりを感じている場合には、いずれのイメージ因子についても有意差が認められた。それぞれに傾向はやや異なり、「統合・柔軟性」では、祖父母の様子に思いやりを感じている場合に、どちらともいえない場合や感じていない場合よりもイメージ得点が高かった。「能動性」では、思いやりを感じている場合やどちらともいえない場合や感じていない場合よりもイメージ得点が高かった。「円熟性」、「積極性」では、思いやりを感じている場合に、どちらともいえない場合、

Table 3 講義前後の高齢者のイメージ得点と知識得点

項目	得点 $M(SD)$				講義前後の比較	
	講義前		講義後		上段:A年度, 下段:B年度	
	A年度	B年度	A年度	B年度	df	t
高齢者イメージ						
統合・柔軟性	-0.01 (.92)	-0.05 (.92)	.05 (.88)	.03 (.91)	109 106	.68 <i>n.s.</i> 1.03 <i>n.s.</i>
能動性	.00 (.90)	.02 (.91)	-.08 (.85)	.05 (.87)	109 106	1.03 <i>n.s.</i> .33 <i>n.s.</i>
円熟性	-.04 (.94)	-.05 (.89)	-.05 (.87)	.14 (.84)	110 107	.20 <i>n.s.</i> 2.20 *
積極性	-.13 (1.00)	-.08 (.79)	.10 (.91)	.13 (.75)	110 107	2.32 * 2.68 **
高齢者についての知識(知識得点)	7.09 (1.96)	6.90 (1.67)	7.49 (2.09)	7.73 (2.00)	106 104	1.85 † 4.23 ***

† $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

あるいは感じていない場合よりもイメージ得点が高かった。高齢者への関心に関しては、「能動性」、「積極性」について有意差が認められ、関心を持っている場合に、どちらともいえない場合や持っていない場合よりもイメージ得点が高く、「統合・柔軟性」の得点差については有意傾向が認められ、関心がある場合に得点が高い可能性が示された。高齢者が好きかどうかに関しては、いずれのイメージ因子についても有意差が認められた。主に高齢者のことが好きな場合に、どちらともいえない場合や好きではない場合に比べてイメージ得点が高かった。高齢者との思い出に関しては、「統合・柔軟性」、「円熟性」、「積極性」に有意差が認められ、それぞれに傾向がやや異なり、高齢者と良い思い出を持っている場合に、どちらともいえない場合や持っていない場合に比べてイメージ得点が高かった。知識得点については、親の、祖父母以外の高齢者に接する様子への評価との間に関連が認められた。しかし、イメージ因子における傾向とは異なり、親の様子に思いやりを感じていなかった場合に、どちらともいえない場合や感じていた場合よりも得点が高かった。

高齢者への感情とかかわり経験との関連 高齢者のことが好きな場合に、いずれのイメージについても得点が高かったことから、高齢者が好きかどうか、かかわり経験との関連を χ^2 検定により検討した。その結果、親の祖父母に接する様子($\chi^2(4)=16.61, p < .01$)、親の他の高齢者に接する様子($\chi^2(4)=13.67, p < .01$)、祖父母の親に接する様子($\chi^2(4)=28.33, p < .001$)、高齢者との思い出($\chi^2(2)=33.87, p < .001$)、高齢者への関心($\chi^2(4)=88.41, p < .001$)のいず

れについても有意差が認められた。高齢者のことが好きな場合には、親、祖父母に接する様子(106名, 82.8%)や他の高齢者に接する様子(105名, 82.0%)、祖父母の、親に接する様子(104名, 81.3%)のいずれについても思いやりを感じている場合が多かった。また、高齢者のことが好きな場合には、高齢者との良い思い出(126名, 98.4%)や、高齢者への関心(112名, 87.5%)を持っている場合も多かった。

教材が異なる講義による変化(年度ごとの比較) (Table 3)

高齢者イメージ 高齢者のイメージ因子それぞれについて、年度ごとに講義前後の得点を比較した。A年度では「積極性」についてのみ有意差が認められ、講義前にくらべて講義後は得点上昇していた。B年度では、「円熟性」、「積極性」について有意差が認められ、いずれの因子も講義前にくらべて講義後は得点上昇していた。

高齢者についての知識 知識得点については、A年度において講義前後の得点差に有意傾向が認められたが、B年度では有意差が認められ、講義前にくらべて講義後は得点上昇していた。

高齢者への感情と、高齢者イメージ、知識得点の変化との関連 高齢者のことが好きな場合と、好き以外(どちらともいえない・好きではない)の場合について、高齢者への感情と高齢者イメージ、および知識得点の変化量を年度間で比較した。その結果、高齢者のことが好きな場合には、「能動性」については有意差が認められ($t(125)=2.17, p < .05$)、「円熟性」($t(126)=1.69, p < .1$)、知識得点($t(121)=.75$,

Table 4 他世代とのかかわり経験と高齢者のイメージや知識との関連

項目	統合・柔軟性			能動性			円熟性			積極性			知識		
	M(SD) はい どちらとも いいえ	t, F	Tukey (t)	M(SD) はい どちらとも いいえ	t, F	Tukey (t)	M(SD) はい どちらとも いいえ	t, F	Tukey (t)	M(SD) はい どちらとも いいえ	t, F	Tukey (t)	M(SD) はい どちらとも いいえ	t, F	Tukey (t)
これまでで、どなたかの看病や介護を経験したことがありますか(ボランティア活動を除く)	.09 (.87) -09 (.93)	1.31 n.s.		-.07 (.92) .05 (.89)	.90 n.s.		-.03 (1.04) -.05 (.86)	114.79 .07 n.s.		-.12 (.81) -.10 (.94)	.16 n.s.		6.93 (1.67) 7.01 (1.95)	214 .32 n.s.	
高齢者(65歳以上の方)と同居したことがありますか	.04 (.82) -.12 (1.01)	1.26 n.s.		.09 (.85) .12 (.95)	1.73 †		-.07 (.98) -.01 (.83)	216.99 .47 n.s.		-.16 (.92) -.05 (.87)	.88 n.s.		6.94 (1.96) 7.04 (1.74)	214 .40 n.s.	
生まれ育ったところでは、近隣のおつきあいがよくありましたか	.07 (.89) -.19 (.86) -.29 (1.12)	2.63 †		.09 (.96) -.09 (.84) -.26 (.61)	1.78 n.s.		.01 (.94) -.19 (.83) .02 (1.00)	2, 216	1.03 n.s.	-.02 (.92) -.29 (.87) -.19 (.81)	2, 216	1.96 n.s.	7.09 (1.87) 6.88 (1.82) 6.56 (1.92)	2, 213	.78 n.s.
生まれ育ったところでは、近所の高齢者とおつきあいがよくありましたか	.09 (.90) -.15 (.91) -.23 (.92)	2.46 †		.03 (.92) .07 (.97) -.17 (.71)	.93 n.s.		.01 (.98) -.13 (.80) -.04 (.91)	2, 216	.49 n.s.	-.03 (.97) -.16 (.80) -.24 (.82)	2, 216	.91 n.s.	7.05 (1.81) 7.00 (1.81) 6.75 (2.10)	2, 213	.36 n.s.
あなたの親が、あなたの祖父母と接する様子を見て、思いやりがあると感じていますか	.08 (.89) -.40 (.79) -.13 (1.39)	5.03 **	a>b	.02 (.94) -.00 (.83) -.12 (.68)	.12 n.s.		.04 (.93) -.37 (.82) .15 (.88)	2, 216	4.03 *	-.07 (.92) -.19 (.83) -.35 (.91)	2, 216	.71 n.s.	6.87 (1.92) 7.15 (1.62) 8.00 (1.70)	2, 213	1.97 n.s.
あなたの親が、あなたの祖父母以外の高齢者と接する様子を見て、思いやりがあると感じていますか	.06 (.88) -.30 (.97) .12 (.95)	3.37 *	a>b	.07 (.92) -.17 (.84) .56 (.55)	2.25 n.s.		.03 (.92) -.26 (.89) .18 (.97)	2, 216	2.30 n.s.	-.03 (.88) -.36 (.91) -.66 (.63)	2, 216	4.44 *	7.03 (1.92) 6.70 (1.60) 9.25 (1.71)	2, 213	3.78 * c>a,b
あなたの祖父母が、あなたの親と接する様子を見て、思いやりを感じていますか	.12 (.85) -.31 (.82) -1.14 (1.39)	12.14 ***	a>b,c	.06 (.90) .01 (.90) -.80 (.63)	3.89 *	a,b>c	.09 (.88) -.37 (.85) -.52 (1.27)	2, 216	6.54 **	-.01 (.87) -.29 (.86) -.79 (1.23)	2, 216	4.75 *	7.06 (1.90) 6.82 (1.73) 6.56 (1.81)	2, 213	.58 n.s.
高齢者に関心がありますか	.07 (.94) -.22 (.82) -.28 (.94)	2.84 †		.11 (.83) -.09 (.93) -.51 (1.22)	3.84 *	a>c	.01 (.93) -.17 (.86) -.02 (.95)	2, 216	.93 n.s.	.02 (.87) -.31 (.91) -.42 (.98)	2, 216	3.93 *	7.03 (1.88) 6.94 (1.88) 6.80 (1.66)	2, 213	.13 n.s.
あなたは、高齢者のことが好きですか	.29 (.79) -.48 (.89) -.52 (.86)	23.17 ***	a>b	.07 (.90) -.01 (.90) -.96 (.41)	3.20 *	a>c	.15 (.86) -.33 (.93) .06 (.93)	2, 216	7.50 **	.09 (.91) -.33 (.73) -.12 (1.66)	2, 216	10.10 ***	7.07 (2.01) 6.91 (1.63) 6.20 (1.79)	2, 213	.66 n.s.
あなたにとって、高齢者の思い出はどのようなものですか(良い・どちらともいえない・悪い)	.10 (.83) -1.20 (.97) -1.00 (.64)	22.11 ***	a>b,c	.04 (.92) -.25 (.67) -.13 (.96)	.80 n.s.		.02 (.89) -.26 (.87) -.12 (1.86)	2, 216	7.87 **	-.03 (.89) -.74 (.76) -.69 (.88)	2, 216	6.35 **	7.04 (1.90) 6.67 (1.35) 6.25 (1.58)	2, 213	.93 n.s.

a:はい(良い), b:どちらともいえない, c:いいえ(悪い) † p<.1, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

$p < .1$)では有意傾向が認められた。いずれも、A年度にくらべてB年度の変化量が大きかった。好き以外の場合には、高齢者イメージ、知識得点のいずれにおいても変化量に差は認められなかった。

考察

本研究では、異なる年度において高齢者に関する心理学の講義を受講した大学生を対象に、発達過程における他世代とのかかわり経験、高齢者のイメージや知識との関連を検討するとともに、高齢者への肯定的な認識を促進できる可能性を検討した。

発達過程における他世代とのかかわり経験

本研究の対象については、日常生活での高齢者を含む他世代との交流および高齢者との同居の経験は、おおむね半数程度にみられた。また、自分の親の、祖父母や他の高齢者に接する時の様子や、祖父母が自分の親に接する時の様子に思いやりを感じてきた場合が比較的多いことがわかった。しかし、高齢者への関心をもつ学生の割合はそれらの割合よりも少なく、高齢者のことが好きである割合はさらに少ないことがわかった。なお、これらの傾向は受講年度が異なっても同様の傾向が認められ、高齢者に対するイメージや知識にも年度間に違いがないことがわかった。

そこで、高齢者イメージや知識が、他世代とのかかわり経験により異なるのかどうかを確認したところ、同居経験があることそれ自体は、「能動性」という活動性にかかわる、比較的とらえやすい側面に限って関連していた。その一方で、近隣や近隣の高齢者という、祖父母以外のさまざまな関係にある人たちとのかかわり経験は、「統合・柔軟性」という、じっくりとかわることによって理解できるような内面的な側面について、肯定的にとらえることにつながる可能性が示された。このことから、発達過程において、他世代との柔軟なかわりを経験することは、異なる世代についての理解の幅を広げる可能性があることが指摘できる。

同居経験それ自体が高齢者の肯定的認識につながりにくいことはこれまでも指摘されており(保坂ら, 1986, 1988)、さらにかかわりの質を検討する必要があると考えられる。そこで、自分の親の、祖父母や他の高齢者に接する様子や、祖父母の、親に接する様子に対する評価との関連を検討したところ、親や祖父母の態度に思いやりを感じていた場合には、思いやりを感じていなかった場合に比べて肯定的な高齢者イメージをもっていた。特に、祖父母の態度は、高齢者イメージの形成とより強い関連をもつ可能性があることがわかった。また、高齢者のことが好きかどうかとかわり経験との関連についての検討では、高齢者のことが好きな場合に、親の、祖父母や親の他の高齢者に接する様子、祖父母の親に接する様子それぞれに思いやりを感じており、高齢者との思い出を持ち、高齢者への関心も高かった。このことから、他世代との、より親密な交流を経験して

いることや思いやりのある態度に身近にふれて育つことによって、高齢者に対して肯定的な感情をもてるようになる可能性を高めると考えられる。

先行研究において、発達過程における質の高いかわり経験の意義についても指摘されており(村山, 2009; 村山他, 2011, 奥村他, 2009)、本研究でもそれらの報告と同様の傾向が示されたと考えられる。

講義と高齢者への肯定的認識との関連

本研究では、講義には年度により異なる教材を用いたことから、高齢者への認識にも違いをもたらすのではないかと考えられた。そこで、講義前後の高齢者イメージや知識得点を比較したところ、いずれの年度においても、高齢者イメージの得点は上昇する可能性が示された。しかし、A年度においては、「能動性」の得点が増加したのに対して、B年度においては、さらに「円熟性」の得点にも上昇が認められた。B年度については、とくに、高齢者のことが好きな場合に、これらの因子の得点の変化量が大きいこともわかった。「円熟性」は、「統合・柔軟性」と同様に、内面的な理解が深まったと考えられる。また、知識得点については、いずれの年度においても講義後には得点の上昇が認められたが、さらに、高齢者のことが好きな場合に限ると、B年度の変化量の方が大きかった。

2つの年度において講義は同様の内容にて構成されていた。しかし、用いられた教材が異なり、B年度のテキストには具体的なエピソードによる解説が含まれており、講義においてもそのエピソードを活用した導入および展開が行われた。講義前には、学生の高齢者イメージや知識得点、他世代とのかかわり経験に差がなかったことから、日常生活における高齢者の様子を具体的に考えることのできる内容を講義により多く含めることにより、高齢者についての知識を高めるだけでなく、イメージも肯定的に変化する可能性があると考えられた。医学や看護、福祉等の分野の専門職業養成においては、実習を通して高齢者イメージの肯定的変化が認められており、教育や臨床の現場における実際のかかわりを通して、正しく理解を深めることのできる可能性やその意義が検討されてきた(大塚他, 1999; 奥村, 2010)。同時に、通常の講義のような限られた教育環境においても、高齢者への肯定的認識を高める教育方法が模索されている(高岡他, 2011)。本研究においては、特別な方法を新たに導入するのではなく、教材の内容を吟味して用いることによって、高齢者の肯定的認識の促進につながる可能性が示されたと考えられ、高齢者理解を深めるために有用性が高いと考えられる。

さらに、高齢者が好きな場合に、B年度においては高齢者イメージや知識の得点の上昇が認められた。このことは、講義の工夫による効果とともに、もともと発達過程における他世代との親密な交流や思いやりのある態度に身近に触れた経験が、青年期における講義による効果を促進でき

る可能性を示していると考えられた。

本研究では、大学生の発達過程における他世代とのかかわり経験について高齢者のイメージや知識との関連を検討した。しかし、本研究における調査対象は医療福祉系分野を専攻する大学生であったため、対人交流に関心が高い可能性があり、他分野を専攻する大学生においても同様の傾向が認められるのかどうかを検討する必要がある。また、高齢者のイメージや知識の得点の上昇が、日常生活にどのような波及効果をもたらすのかということや、高齢者への理解の促進につながる講義内容や教材について、FDの観点から受講した学生の評価や感想とも関連させて検討することが今後の課題である。

引用文献

- 保坂久美子・袖井孝子(1986). 大学生の老人観 老年社会科学, **8**, 103-116.
- 保坂久美子・袖井孝子(1988). 大学生の老人イメージ—SD法による分析— 社会老年学, **27**, 22-33.
- 久世淳子・奥村由美子(2010). 大学生の高齢者に関する知識(2) 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1131.
- 村山陽(2009). 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 社会心理学研究, **25**, 1-10.
- 村山陽・安永正史・大場宏美・野中久美子・西真理子・李相侖・渡辺直樹・小宇佐陽子・深谷太郎・竹内瑠美・倉岡正高・新開省二・藤原佳典(2011). 小学生の世代間交流が中学入学後の地域交流参加意識に及ぼす影響—絵本の読み聞かせ高齢者ボランティアREPRINTSの実践報告から— 老年社会科学, **34**, 382-393.
- 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子(1994). 小学生と中学生の老人イメージ—SD法による測定と比較— 社会老年学, **39**, 11-22.
- 奈良県医師会(1991). 看護老人の老人観に関する意識調査報告書.
- 奥村由美子・久世淳子・谷向知(2002). 高齢者とのかかわり度合による痴呆性高齢者のイメージの違いについて 老年社会科学, **24**, 262.
- 奥村由美子・久世淳子(2009). 大学生の高齢者イメージに関連する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較— 日本福祉大学健康科学論集, **12**, 31-38.
- 奥村由美子(2010). 認知症高齢者への回想法に関する研究—方法と効果— 風間書房.
- 大塚邦子・正野逸子・日浦瑞枝・白井由里子(1999). 看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に— 老年看護学, **4**, 98-104.
- Palmore,E.(1977). Facts on Aging : A short quiz. *The Gerontologist*,**17**,131-137.
- 高岡哲子・岡本麗子・榊原千佐子・小堀ゆかり(2011). 看護学生が老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージの検討 北海道文教大学研究紀要, **35**, 25-35.
- 内閣府(2015). 平成27年度高齢社会白書(全体版)
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html 2015/10/27

Changes in image of elderly people before and after the lecture: Relation with the experience of intergenerational exchange during developmental process

Yumiko OKUMURA and Junko KUZE

Abstract

It is important for different generations of a super aging society to maintain good relationships with one another. Recognition of the elderly, including how other generations perceive elderly people, has been investigated based on images of the elderly. These investigations have indicated that even positive images of the elderly held by some people in childhood, become negative, as they get older. Moreover, adolescents including university students generally have a negative image of the elderly. This study investigated university students' experience of exchange with different generations during the processes of their developmental. Furthermore, how images and knowledge of elderly people change as a result of hearing lectures was examined. Results indicated that closer interactions with different generations in the process of development, as well as daily-life contact with people having considerate attitude help university students to more deeply understand different generations and develop positive perspectives about them. It was also indicated that hearing lectures increased scores on the image and knowledge of elderly people. Teaching material consisting of concrete episodes about elderly people is considered effective for developing a positive image of the elderly. Furthermore, when university students like elderly people, scores for the image and knowledge about elderly people increased significantly. It is suggested that content of teaching material should be carefully selected to improve the effects of lectures. Furthermore, positive experiences of involvement with other generations in the processes of development increase the effects of lectures for adolescents.

Keywords: image of elderly people, lecture, intergenerational exchange, developmental process